



說世譜
三



誹諧世説卷之三

目録

惟然坊智家小一宿の説
 惟然坊誹諧の意と終説
 秋の坊幻住菴に宿する説
 蕉翁金城集會の説
 秋の坊早稻米を求む説
 秋の坊万子の炭をとむ説
 許六命終の時おろしの説



元兆御中歳旦の説

牧童素堂の勺物語の説

北枝如柳ふ酒を乞説

北枝家誄諧の夜盗人の説

北枝家焼失の説

北枝雨中吟行の説

誄諧世説卷之三

惟然坊婚家の一宿の説



惟然坊は其流の酒を經廻とて時ある純士のまゝに
やゝ其のつとをた比妻をむりてつとをたぬれど
まをぬれど振神の小神のまゝに衣柳ふけりて
たる朝とく家より下女をぬれりてるる客僧はとく
出りたりとててやりたあまをもちたる候とてあま
衣柳ふけりてる家の小神一ツをぬりてけられぬとみ
たるものふとてとまり入てあまにかくと若るふあし

の曰惟熱城の中へ登るべし小器の強ふあはれ
まう一洒落の乃人されば朝の露を凌ぐたゆまず
小神成るべく往まらぬものよめあはれさ終らぬ物
ころに昨日のそここれ風土のころあらんをさこ
ぬまの先終る人あらんまうとらんやがて坊の終るこ
まるべのころ人使めてあはれはうとらん家は惟熱城を
家よあはれさあらん其のころ今朝とく立あはる
に神風のあはれさ甚きうらうらふ立あはりて衣
折ふあはれ小神をひらうとらんよふあはれい来るのえ

ころ小神なるのあはれこれとも男女の扱のりらハ
見えど定て是とやあはれんと彼振神とる伊達
換振の小神をたあはれ其使うみはけりらるとそ
終る人あはれに忘まうとらん風家の後者といふ

惟熱坊誂諧の意と語説

惟熱城搦及炸終る惟熱とてあはれとて久くは純
の席とあはれとあはれと居けりらるとあはれ人あはれ
何とて純結れ交りあはれとる今宵惟るあはれとて純
借あはれとてあはれとすあはれと坊あはれとて

云々の記すといふ人か家の誹謗作らりこれの日か
て記さ日入て休ふ喫茶踏飯行住座臥もこれか
能得なりそれを外ふ能得せよといはれりもぞや能得乃
るの能得と者と替りたる人よこそすむべき業を
いしれんばを人且秘ら且歎とて久りたるを

秋の切幻住庵ふ宿する説

秋の坊々令城了名る此風流徳化れ大匠とて
祖翁湖あり幻住庵にみせし時家宿らぬの小
う記を記さるるこの終いて一夜二夜くら寝を

に翁匠遁者の文れ人のゆ無常迅速に戒まど
いし終る物語何り禁まどて送る終る

やどて死ぬきし終る人す終る乃ま 芭蕉

と一白れ教悔ありしもけ時のとらんを

蕉翁令城集會の説

令城を小校と杜の坊といはれしに睦ましき
あまらに獨活強骨れわしそいなきをの何う中
りしれやうにもそ終る祖翁知道形仰のしれ
令城よ志づく校を休え終る小校なりしも對

面のうらぶ傍の中やうたれはける紙山枝より秋
 け切へ露がうりもあどまりくしくしく秋の切ける紙
 まゆーしそだ蕉翁の庵よりうらうて對面と遠
 くれとも秋山枝がきこる事とこましく傍よりうくそ
 小枝秋の切曾良なぞ翁よりともはるる序
 とも其後日の小枝より一白物もぞりける紙翁も
 りあしはるのく切がまゑと縁しはるるとき

秋の坊舎終の説

秋の切乃令終を正月四日さうしとぞを日友とせし



秋の切

日

孝東より春坊の唐土訪ひ来り候に心をあさる
候留旬とて後々遠也坊曰紙磨作まうまうと云て

ふれ月四日以後のけ紙を去れよー 秋坊

と口とさびうとさくしがらうらむとて息後とぬ
孝東駭あつちの中いもけ坊のはびぐ自色を忘る
とらうまひたがらと感後ふ後ふとどなう
い紙はびとえとく矢けり秋の坊 孝東
と名あぬ一ふ紙ふぬとてのこく葉アけりとぞ

秋の坊早稲米とある説

秋の坊ある年秋をぞらうとてそれさうらうの
日早稲米粥とてまうとせしむるはあつて後り給くと
約来り其日にさうて北枝徒吾小春白空さうとこ
らひ坊の唐土訪ひ来り候に坊のらうらむと云れど
目くさう紙まうとさうとて坊のらうらむとて
さうらむく約をたうて化よと云れさう紙好の
るん坊は曰其のさうとて孝東より早稲米
をとりぬを紙約来せし彼は名家さうとて坊の
あつとて冬人を紙好とて孝東より是と云

らぐとれと其物と愛するは思ふれ物ある故に
 しくよりして所中とあはれいふるはけうの物と
 おえたるふいぬい高家のゆゑにけうも海はと
 と右よかくほらうとていふるはけうのま其ま
 東より誠さうしんふさでさうさうさうさう
 うとて同なる時何日さうしん誠さうの物と
 らうさうしんをおとすやうにして其日のま
 もれとさうしてさうしんさうさうさう

秋の坊万子にゆきをを説

秋の坊京原にたぐりちちあつて今もや雪はうて
 指水もふるふと衣一帯れ糸を氣とまのぐさ
 なしよりさうしんさうさうとて

さうさうしんさうさうとてさうさうさうさう
 とさうさうしんさうさうとてさうさうさう
 さうさうしんさうさうとて

さうさうしんさうさうとてさうさうさう
 とさうさうしんさうさうとてさうさうさう
 さうさうしんさうさうとて

流俗をくよ

されど其の頃のほいし面白くかぬやけのちかきこと
 うさうの風流をど流俗なれ父母なるく一秋の切ふて云
 風流人々やまことしの貧乏なるく一死後みればちかきあり
 たるふら目も昔くことしなれらる其細ふきうらむ坊の
 死後うさうて一粒一沙の流俗のほいしどさうらむく
 こそよその風流のくさうく

評六命終の時ねふの説

評六と云は振の産や武門をぬらぬ蕉翁曰画を

取て師く一俳諧に中へて弟子とくこの病ひりれ
 終ふ丹青の妙をゆきう一生家ガキと自負して作を
 薙物とせよは家傑の修行者ありたうう翁の後中
 へ足駄をたて入くともかゝ家ありとさううある命終
 らんとする時の奇なり

今こいつらもが死ぬると思ひはくとも死後がくそよまへ
 さと老後を皮膚をぬきかたを印自負たあうはく自
 撰の風俗又選の扁突韻寒字流法師や其書はくく
 たり今このやうも自負するものハ多かれとも大う

象湯よりあしく人成さうとて象とたきひつて成
 宗とすれは終らぬ道なきとつるや平あはれ
 ちうらひ宗カサとく自負れちりて却て諸人乃
 笑ひものとぬたごひかきつるよとぬち一科との
 自負いたらつすりてぬ流より出て終り風流と忘
 き故了始もさく終りもさく宛轉する環の如
 城了あつくぞの自負も又ぬ流なり

元兆撰中歳旦の説

元兆ちりて金城の春うて終る位一醫業成ると

ぞとつりるとの嘗て衆者人うさうとみ甚遠累城
 うむつて撰中に年成りけつふをめつて年中にて
 猪乃首れはよきよよ花の春 元兆
 陽空のまもちらぬさうとて
 ると笑ひらふまへ人をかこさうとつと事な
 ちてあふあやほりまれしつれとて海に経る
 累城の中成あつとつてほびの眉とむきさうら
 ちとけけせぬあつとつてこのさひとつりけつとや果ら
 亡とるしとつとつれとるつとつとぞ

牧童素堂の白物語の説

牧童ハ北枝が見てて才能をあれそりば対さる同
絶のあはれ終るといふそのいかに人のかえんも人
くよまをさう教昔ら誰彼をば梅翁の酒翁と志
たひ後 蕉翁の門へ入て翁も牧童ハそれとのまうと
巻紙ひくおのこなり生涯眠る紙やかくおのまのた
に之象びく芭蕉の翁へゆきて武の素堂の
浮葉をよみし蓮風情さうとつる白れ物語不
乃ふ翁の曰はくは蓮と音くさう人くがよりや

糸一結つ其外をいひもさるばるをよまうとや
まてのくふ己うねあぬも底うく知つてやうに
とてまはつら今日の人情あうと牧童がどなたかく
ふあつふえ控をさういひてさうた事いふそ習
子習つてを傳ふかこの説くまけはうくのい海
先なうんそや

孫りくく月とそ出まあちち 牧童
とくく名るくく人たう

北枝如柳酒を乞説



新世談

卷二

九

金城より北枝の古き蕉菴の門人ありしにその
 如柳と名をさしむる如柳の酒を賣るるに
 とは小枝の酒を嗜むなり一日毎に彼を訊く
 酒を呑んた籍が端迄は旬旬の風流をほくす
 彼酒家初の程をその終日におもむるに後
 かかへんがさるるにそのあつたはもその
 風情なりとある時小枝ありて酒を呑ん
 たりありてのふねう移るるにそのあつたは
 志がくくして小枝を家の下かへぬ味やつと

百々りふ下女又ほのりきんと合点してありて言
 べれば小枝の口をくく一盃の酒とくくありて
 の如柳も後をかきて大勢い一様とや
 くらぬとせ

夏 酒や家とのりけ火乃車 北枝

北枝家誹諧夜は魚人の説

小枝の家を誹諧ありては夜更に魚人入りて
 けいさりの小枝を告ぐは小枝ありては
 條をいふは魚人の説とせしむるに

之は居りてお小皆静まりて其席を思ふだけお
せりしれし一茶釜らんく
とよお白物より小枝をわくど

ぬま人の目うけらる目あはらま 小枝
と身より此白さをまきと留きと思ふ屋とま
ら人もあ終ど是をらうう障りありて目ようけ
らぬくの白小枝とまらうけらる

小枝家焼失の説

之様年中金城に比真の憂ありて席屋を

小枝中とき小枝の家は炬燵小枝のしを友どら
しつてさやうりつとま

焼よりけりけりとも花を散とま 小枝

かくはささつて悟然自若たり是人世のささ
あさり川の常さる事さうく女もる風土なれ
と人皆甚厚徳とくしつとれとぞ其後又北枝火
小枝さるし従吾人さるしけりありてむしれ
焼いりやと尋ねく

従吾

ゆらもに奴もさるしつて火燵の中に一白作廢生

五

小枝

わらわは祝も草もすむらさきもさかしの家かゝるは
うらな申も清き雪をまじふべからず常しくの風流もほ
ておぼくもさるふよとて

は時の白く家も音もあふ集り略してたふ記と

焼よりうらなも花もらうとてあはれ

北枝雅見がむの音情さう

やもふりうらなも梅もらうとてあはれ

梅もらうとてあはれ

雪もさかしの家かゝるは

雪情さう

こゝ梅の泣候うらな水鶏うらな

雪もさかしの家かゝるは

梅もらうとてあはれ

雪情さう

北枝雨中吟行の説

あはれ年春の雨降てをぐり晴なるふ小枝梅も
あはれうらなもさるふよとて

一ツリカキと問はるに答ふもしむらうくうりや
そはられに致もいさこいりたぞ

鬚白記かき人けり梅の玉 北枝

